大引遺跡発掘調査概報

1985・3

社団法人 和歌山県文化財研究会

序

和歌山県土木部が、日高郡由良町大引に予定している県道衣奈・大引・阿戸線道路改良工事にともない、予定地内に所在する大引遺跡について、埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

大引地区は、かねてより弥生時代の木槽が出土したり、古墳時代の製塩土器をはじめ、種々の遺物が確認されているところであります。

今般の発掘調査におきましては、平安時代を中心に各時代の遺物が多数出土し、又皇朝十二銭の一部もみつかり非常に意義のある調査になりました。ここに、その概要を報告し、一般の活用に資したく存じます。

最後に、調査にあたり終始ご懇篤なご指導を賜りました諸先生方をはじめ、関係各位、種々ご指導、ご協力下さった地元の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和60年３月

社団法人和歌山県文化財研究会

会長　山　東　永　夫

例　　言

1．この概報は、和歌山県日高郡由良町大引にかかる県道衣奈・大引・阿戸線道路改良工事に関する埋蔵文化財発掘調査の概要である。

2．発掘調査は、社団法人和歌山県文化財研究会が県教育委員会の指導を得て昭和59年10月から11月にかけて実施した。

3．発掘調査は、調査員として永光寛（県教育庁文化財課）が担当し、調査補助員として栖原伸精・吉田収が参加した。

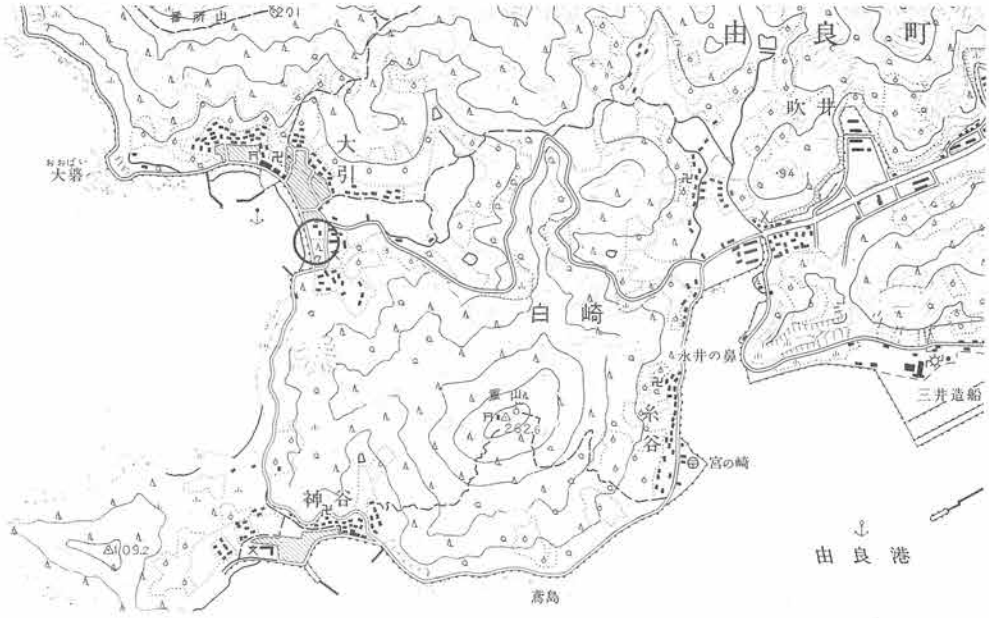
4．この調査には、大引地区の川口正男区長、由良町公民館、日高地方教育事務所に協力を得た。巽　三郎氏（調査委員・県文化財保護審議会委員）、山口　斌教頭（由良小学校）には調査中種々の助言を得た。

目　　次

序
例言
1　遺跡の発見と経過 …… 1
2　調　　査 …… 1
3　ま　と　め …… 3

図版目次

図版第1　調査地点
第2　土層図
第3　遺物実測図①
第4　〃　②
第5　遺跡全景
第6　調査状況
第7　土層写真
第8　遺物写真
第9　〃
第10　〃
第11　〃



位置図　　（1：25000）

1　遺跡の発見と経過

本遺跡は、大引湾内の海岸砂丘に位置する。昭和31年保安林に囲まれた砂丘上に土器の散布が確認され、次いで32年白崎小学校北西隣の家屋建築工事中弥生時代末の甕・土錘が出土。52年には同小学校の正門より県道、神田川を隔てた砂丘の一部がバス駐車場新設工事により削平され、古墳時代の須恵器（杯）、奈良・平安時代の土師器（椀・甕）、製塩土器（厚手丸底）、土錘などが出土。又砂丘の後背湿地にあたる小学校東端において、昭和47年水田の土壌改良作業中、地表下0.5mから0.8mに自然木を利用した木槽と称する遺物が出土、伴出遺物には弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての高杯・甕・製塩土器（目良式土器B類）などが出土している。

〈参考文献〉

山口　斌「由良町内の製塩遺跡について（その２）」（「由良町の文化財」８）1981年

2　調　査

南北に発達した砂丘は、南端から北へ約90mのところで小さな鞍部が形成されており、そこを境にして南北の様相を若干異にする。鞍部に北接するところは、南北約20m東西約

10mの平坦地をもち、それより北は人家が密集する。南側は、稜線部に平坦面をもたず砂丘横断面三角形を呈する。標高においても南が約１mほど低く、砂丘幅をせまくなっている。

こうした砂丘地帯にかかる道路建設予定地約1380㎡を調査対象とし、保安林・雑木の伐開を行い、トレンチ法による遺構・遺物の確認作業を計画した。トレンチは、合計６ケ所約 270㎡の予定であったが、北側より順次作業をすすめた結果第４トレンチ（ＴＲ４）において、台風による土砂流失を確認、これより南側に２ケ所の試掘計画をもっていたが、テスト棒による確認等により同じ被害を受けていると判断し、計画を変更ＴＲ４以北にトレンチ２ケ所を新たに設け、遺物の確認後各トレンチを拡張し約 290㎡の調査を行った。

トレンチの設定は、鞍部北接の平坦地に砂丘を縦断するかたちにＴＲ１（13m×２m）、横断するようにＴＲ２（11m×２m）を十文字に直交するよう設定。順次南側にＴＲ５（9.3m×２m）・ＴＲ３（10m×２m）・ＴＲ４（19m×２m）の３本を稜線に直交するよう砂丘前面に設け、ＴＲ６（15.6m×２m）はＴＲ５・３に十字状に交るようにした。

このように設定したトレンチのうち、堆積土層の残存状態が良好だったのはＴＲ１・２のみで、ＴＲ３・５・６は波による被害を何等かの状態で受けており、ＴＲ４に至っては全壊の状態であった。

調査区域の堆積状況を現地表が標高10.2mをはかるＴＲ１の西壁により観察してみる。地表から約３m下までの間に砂層・砂礫層を含め11層の堆積を確認することができる。第１・２層はガラス片などを包含する近年の砂層。この層をＴＲ２で観察すると海に向って下降している。第３層は暗茶褐色砂で近世の灯明皿が出土。第４層は近世の陶磁器片を包含するよく締った黒色砂Ⅰで貝殻・炭なども出土する。第５層は暗茶褐色砂の無遺物層。第６層は近世の擂鉢片等を包含する黒色砂Ⅱで黒色味は第４層よりもやや淡い。第７層は１～５cm大の礫を含む砂礫層で、波打際でみかける非常に磨耗した近世磁器片が出土している。第８層は暗褐色砂の無遺物層。第９層は黒色砂Ⅲで中世の瓦器椀・貝殻などを包含する。第10層は暗褐色砂の無遺物層。第11層は６世紀代の須恵器と奈良・平安時代の遺物が混在する黒色砂Ⅳで、焼けた石・灰・炭なども認められる。この第11層よりも下位には、暗褐色砂・暗青灰色砂など認めるが無遺物である。

以上が調査地ＴＲ１の基本層位である。これらの層位はトレンチごとに細部において異なっている。しかし、全体的にみると類似しているものが多い。

層位の傾斜は、近年の堆積に属する第１・２層が海岸に向い下降、第３層から下は逆に

砂丘後背側に下降する。この傾向は各トレンチとも同じで、砂丘の稜線が波の侵食により後退しているものと解せられる。

次に、出土した遺物は総数35,455点を数える。出土層は、標高７ｍから7.5ｍの遺物包含最下層黒色砂Ⅳが主で、大半の遺物がこの層より出土している。

遺物の種類は、須恵器（杯・壺・甕）、土師器（椀・杯・甕）、黒色土器（椀）、瓦器(椀・小皿)、製塩土器（厚手丸底）、カマド、フイゴの羽口、土錘（総数 219点、内紡錘形有溝土錘 171点）、銭貨（隆平永宝１点・長年大宝３点・寛永通宝１点）、近世陶磁器などが出土している。

上記の遺物のうち、中世に属する瓦器（黒色砂Ⅲ）、近世に属する陶磁器・土師器・寛永通宝を除き大半が黒色Ⅳからの出土である。

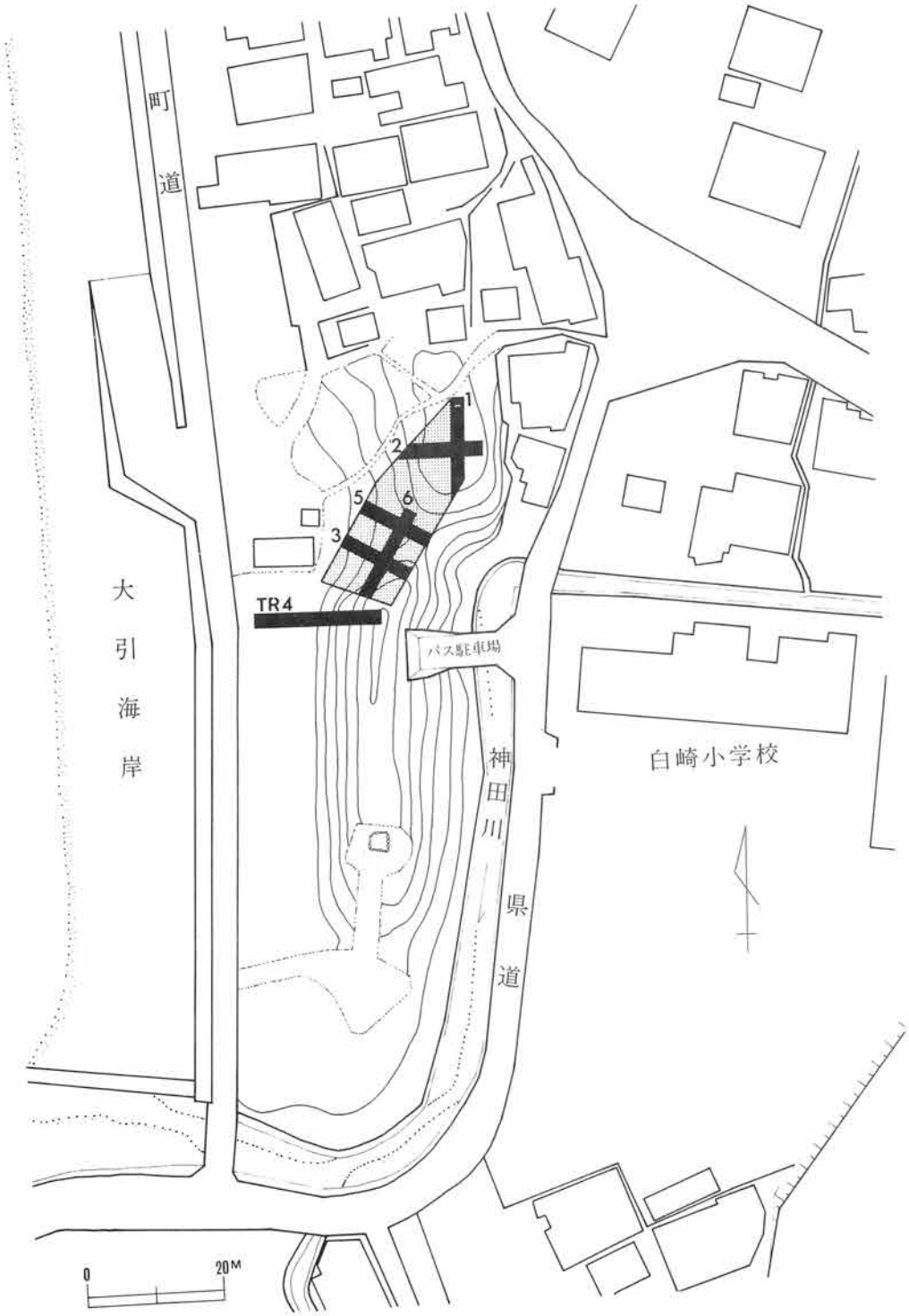
３　まとめ

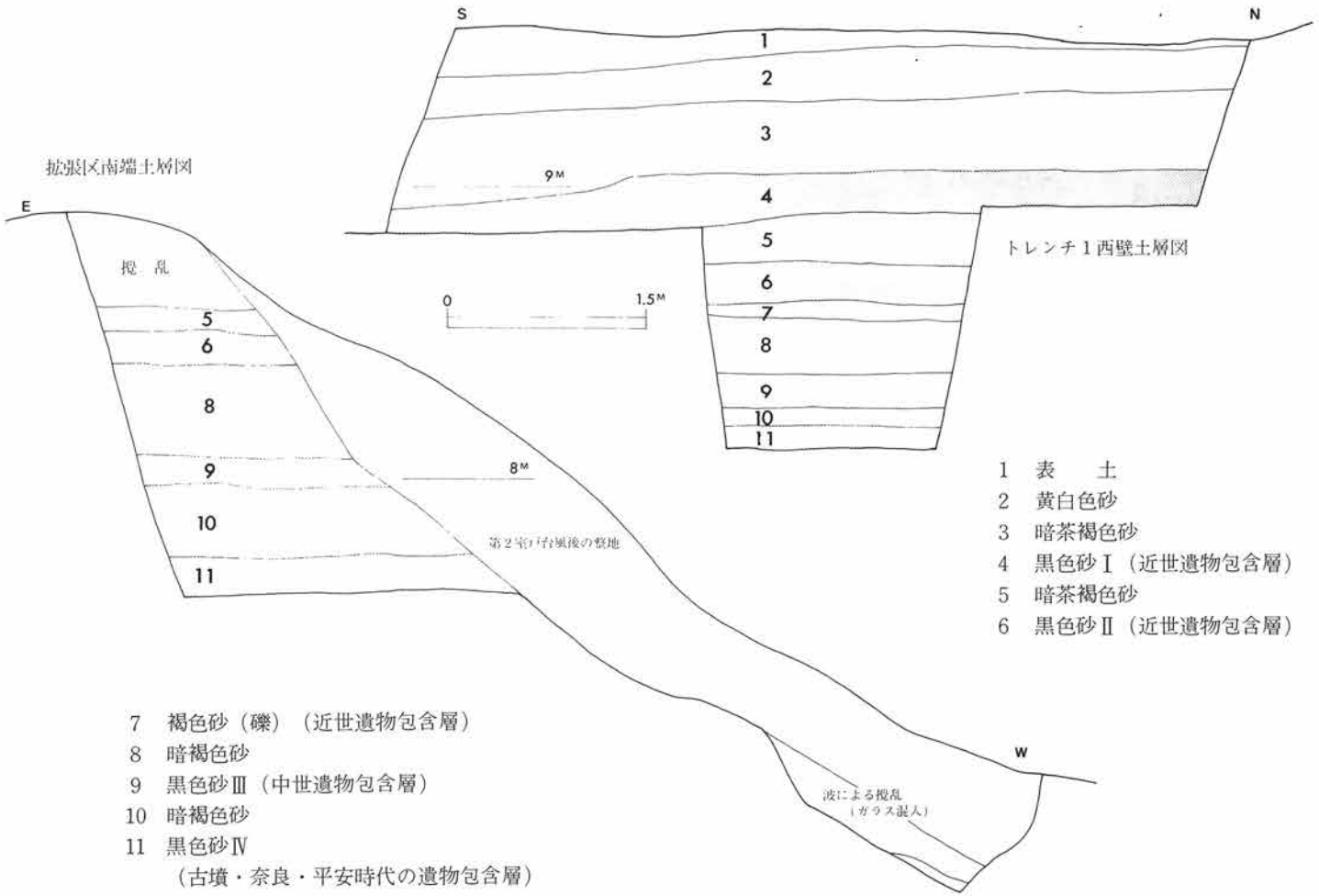
調査結果を要約すると。まずＴＲ１でみた11層の層位は、黒色砂層と褐色系砂層に大別することができる。このうち前者は遺物を包含し、後者は無遺物層であることが多い。このことは、砂丘の利用が黒色砂層の時期に限られ、褐色系砂層の時期には一時的に放棄されていたとみることができる。又砂丘利用の開始は、黒色Ⅳ層に包含される６世紀前半の須恵器をその初現とし、遺物の量から平安時代前中期を砂丘利用の最盛期であったと考える。その利用は、土器製塩終末期の厚手丸底の製塩土器、大量の土錘が認められることから、製塩と漁業の場として利用されていたものであろう。ただ同じ黒色砂Ⅳから、フイゴの羽口・少量の溶解物、あるいは皇朝十二銭の隆平永宝（796年初鋳）と長年大宝（848年初鋳）が出土していることは、砂丘の利用を考えるうえにおいて今後の課題としなければならない点である。

平安時代を中心に、以後においても中世・近世・近現代と非連続的に砂丘利用が確認されるのである。しかし、海に面し風波に非常にもろい性格をもつ砂丘は、たえず地形的に変化をきたしたものと考えられ、事実近世の一時期（ＴＲ１第７層）には波が砂丘を越えており、又もう一つの事実として近世以前の堆積層が海に向って上昇していることである。このことは、現在の砂丘の稜線よりも、近世以前の稜線のほうが、もう少し海側に寄っていたとすることができよう。

今回の調査で、６世紀以後の砂丘形成・利用を若干知りえたことは貴重であり、今後出土遺物を詳細に検討することにより、砂丘利用の形態をより明らかにできるものと考える。

図版第一　調査地点



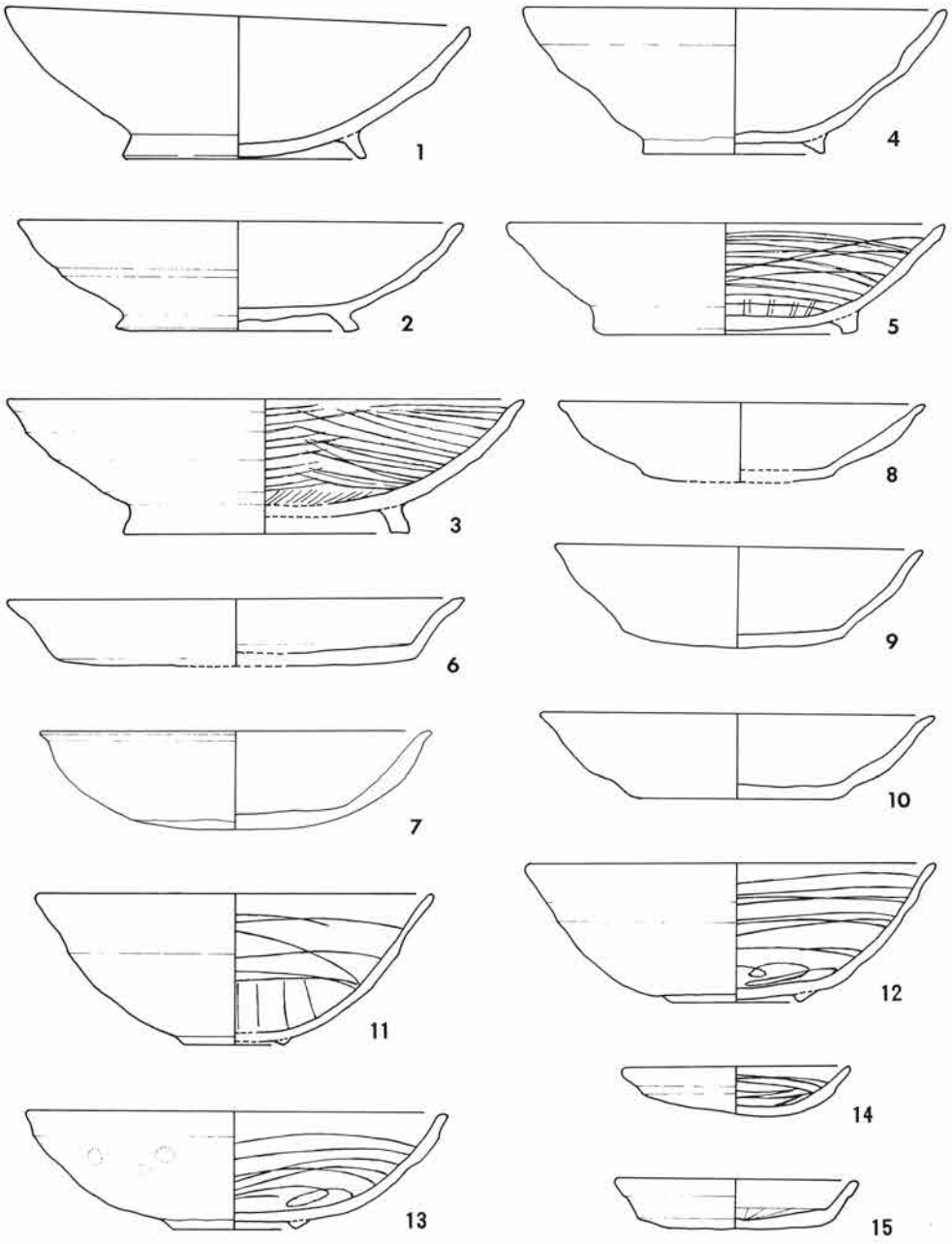


1　表　　土
2　黄白色砂
3　暗茶褐色砂
4　黒色砂Ⅰ（近世遺物包含層）
5　暗茶褐色砂
6　黒色砂Ⅱ（近世遺物包含層）

7　褐色砂（礫）（近世遺物包含層）
8　暗褐色砂
9　黒色砂Ⅲ（中世遺物包含層）
10　暗褐色砂
11　黒色砂Ⅳ
（古墳・奈良・平安時代の遺物包含層）

図版第一　土層図

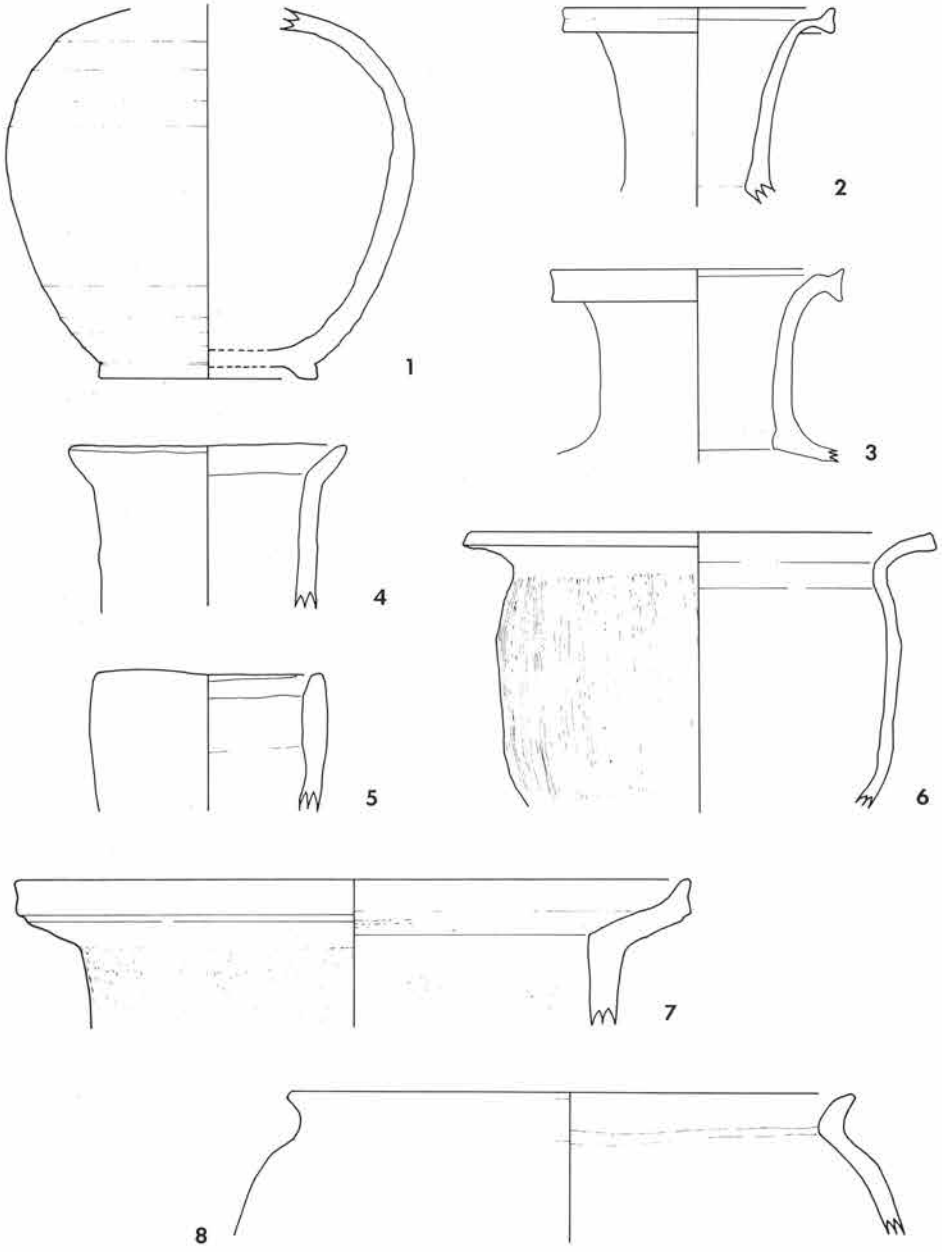
図版第三　遺物実測図①



1～4・6～10　土師器　　5　黒色土器　　11～15　瓦　器

0　10cm

図版第四　遺物実測図②



1～3　須恵器　　4・5　製塩土器　　6～8　土師器

図版第五　遺跡全景

（上）　遠　景　　（下）　近　景

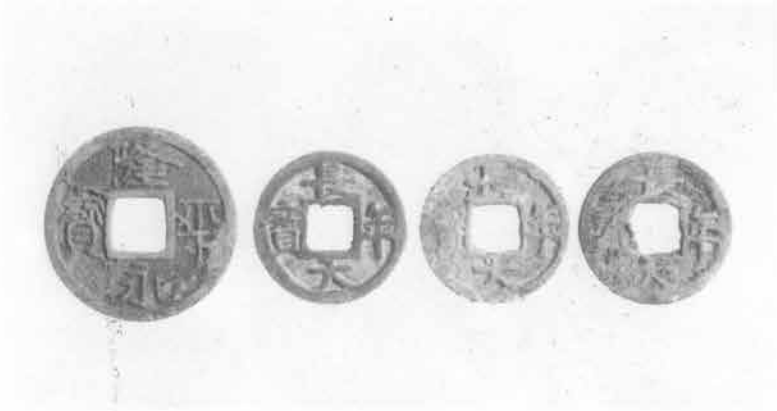
図版第六　調査状況

（上）　拡張区　　（下）　遺物出土状況

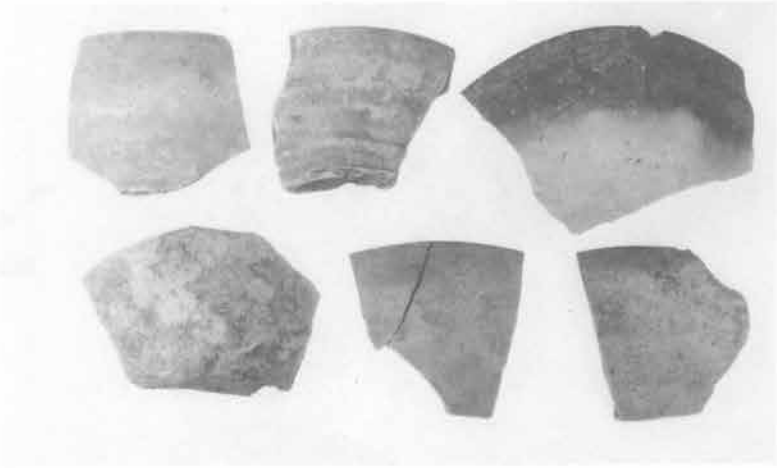
図版第七　土層写真

（上）　拡張区南端土層　　（下）トレンチ１土層

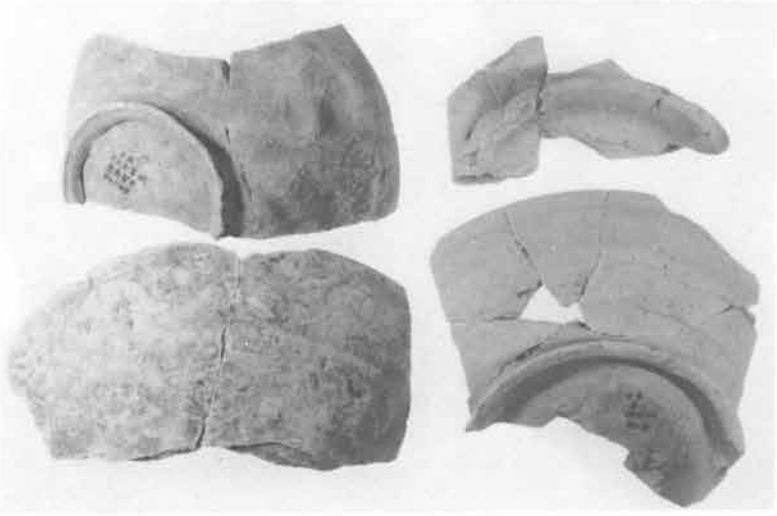
図版第八　遺物写真①



1．銭　　貨



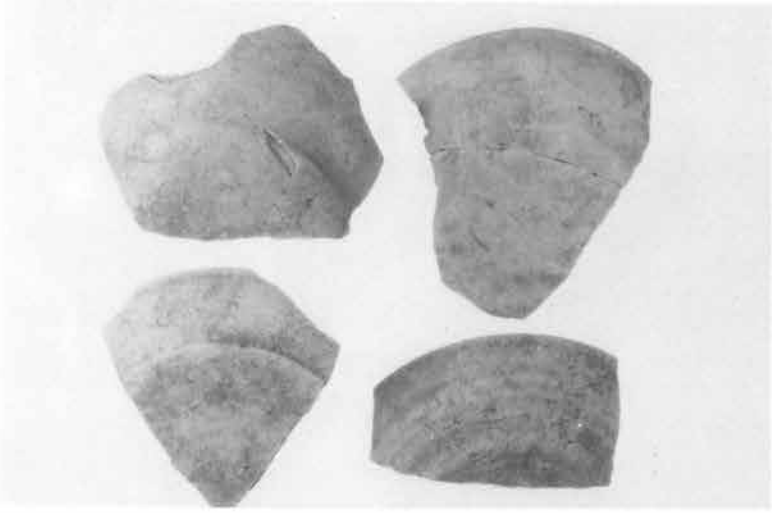
2．黒色土器



3．土 師 器

図版第九　遺物写真②

1．土師器



2．土師器

3．土師器

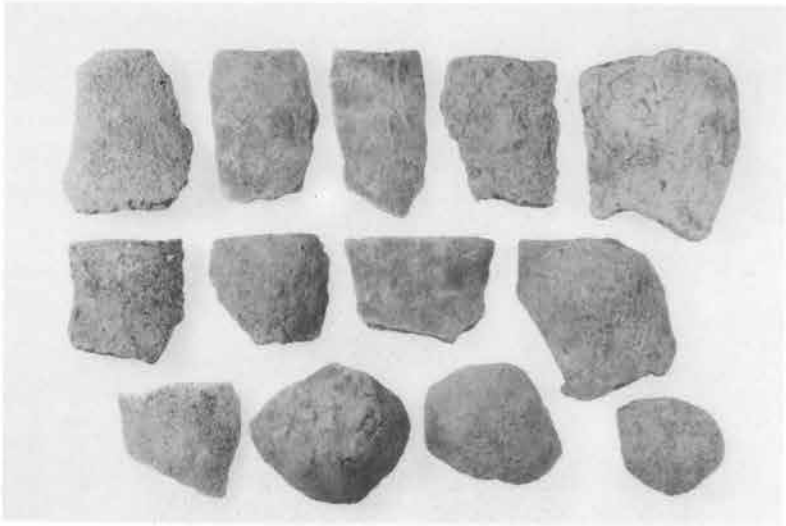
図版第一〇 遺物写真③

1．土師器

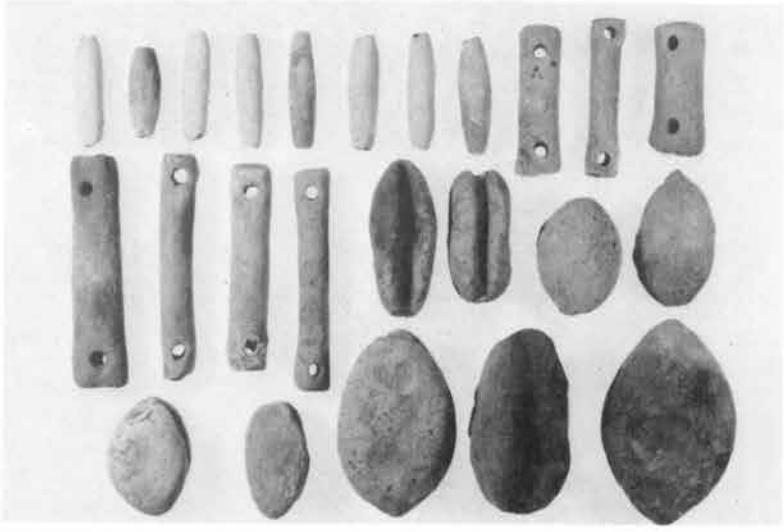
2．土師器

3．須恵器

図版第一一　遺物写真④



1．製塩土器



2．土　錘

大引遺跡発掘調査概報

昭和60年 3 月

発行　社団法人和歌山県文化財研究会

印刷　　邦　　上　　印　　刷